

概要

日時:平成26年1月25日 13:00-16:00

会場:石巻赤十字病院会議室

主催:国立がん研究センターがん対策情報センターがんサバイバーシップ支援研究部

共催:石巻赤十字病院

定員:50名

参加費:無料

プログラム:

1.基調講演「診断後も納得して働くために」

国立がん研究センターがん対策情報センター
がんサバイバーシップ支援研究部 高橋 都 部長

2.「仕事と治療の両立」体験発表

- ・武田智枝さん ~ 患者の立場から(石巻市健康推進課)
- ・Aさん ~ 患者の立場から(居宅支援事業所・介護福祉士)
- ・加藤悦子さん ~ 雇用者の立場から(YI'Sケアサポート株式会社)
- ・玉置一栄さん ~ 医療者の立場から(石巻赤十字病院 看護部)

3.カフェタイム:お茶をしながら、仕事や日常生活のことをみんなで話そう

報告

沖縄カフェの翌週、今度は宮城県の石巻市で第2回ご当地カフェが開催されました。共催を引き受けてくださったのは、石巻赤十字病院。「東北で一番活気のある病院」をビジョンに掲げる地域の中核病院です。2011年の東日本大震災の折には、救護活動の最前線に立つとともに、全国から集まる医療チームの拠点として大きな役割を果たしました。

地域に根差したこの病院に、土曜の午後、街のみなさんが大勢集まってくださいました。



石巻赤十字病院全景



開会の挨拶

開会の挨拶は、石巻赤十字病院 金田 巖院長の、40年以上にわたる医師生活を振り返るお話から始まりました。がん医療がひたすら根治性を追求した時代から、治すことに加えて生活の質を維持すること、そして心のケアや緩和ケアを大切にすることが重視されるようになったプロセスです。「患者」は地域で暮らす人間であり、「社会人としての回復の一環として就労支援があるのでしょうか」という金田院長の力強い言葉とともに、カフェがスタートしました。



第1部基調講演 「診断後も納得して働くために」

国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援研究部 高橋都部長

高橋部長からは、まず「がん」が長くつきあう慢性病に変化しつつあるにもかかわらず、一般市民の「がんイメージ」は依然として「稀で治りにくい病気」にとどまっており、それが社会復帰に向かう患者本人にとって大きな妨げになることが指摘されました。続いて、治療と就労を両立する場面で本人や家族が直面する困りごと、会社関係者側が思案すること、さらに医療者のとまどいについても報告されました。



続いて、病気になっても納得して働くための重要ポイントが示されました。まず治療を受ける本人

は、病状や治療のスケジュールを正確に理解して職場に説明し、必要な配慮を待つのではなく積極的に引き出すこと。職場側は、「がんイメージ」にふりまわされず、働く本人の個別状況をよく把握して現実的な配慮を検討すること。そして医療者側は、患者と職場の双方が正確に状況を把握できるように、病気や治療についてわかりやすい説明を繰り返すこと。能力と意欲のある従業員の活用は企業活動を活性化させ、支援を受けた従業員の会社への忠誠心や職場全体の士気も高めます。それぞれの立場からの工夫によって状況はかなり好転することが強調されました。すでに入手可能な各種支援ツールも紹介されました。

参加者のアンケートでは、「勇気がもたらえた」「社会復帰は特別なことではないと感じることができた」「仕事を持つ意味を改めて考えた」などの声がありました。

第2部「仕事と治療の両立」体験発表

第2部では「仕事と治療の両立」をテーマに、患者・雇用者・医療者のそれぞれの立場からの体験発表がありました。

(1) 武田智枝さん ～ 患者の立場から(石巻市健康推進課)

保健師として勤務していた武田さんは、4年前に悪性リンパ腫と診断され、抗がん剤治療と骨髄移植を受けました。治療中に東日本大震災も体験しています。

相談相手として頼りにしていた上司が退職したあとの職場に復職。事務中心の仕事に移るものの、震災による影響で職場の皆は過重労働を余儀なくされており、現場の状況はかなり辛いものでした。「病気が治ったら何を大事にしたいと思ったんだっけ？ あ、子どもとの時間を大事にしたかったんだと思うけど・・・」と言う武田さんは、思い切って当時の仕事を辞める決断をします。

その後、地域の中で独自ビジネスを立ち上げる農家の事務作業を手伝った武田さんは、“地域のオバチャンたち”から大きな刺激を受けます。「オバチャンたちがたいへん元気に仕事に取り組んでいる様子を目の当たりにして、私自身もすごく勇気づけられて。被災したけれどみんな全然落ち込むどころか、むしろ立ち上がろうと頑張っていることに気づかされて、私自身もできることを何かやっていたかなければいけないと思いました。」そう語る武田さんは、それからケアマネジャーの資格を更新するとともに、第1種衛生管理者の資格も取得します。前の職場を辞めてから半年間のことでした。

無菌室に入ったり、退院しても人前に出られない状況が長かったりした武田さんは、人と遮断されて社会から隔離されているという思いがありました。そんなとき、周りから「手伝って」「やってもらってすごく助かる」と言われることで、自分が社会とのつながりを持っていると思えたことがとても嬉しかったと言います。現在は市の健康推進課にお勤めです。

「心身の回復にともなって、自分ができることって何だろうと考えた時に、自分が持っている資格を活かして地域の復興に少しでも役立ちたいと。今はそう考えながら、がんになってからの5年目を迎えているところです。」と話を結ばれました。



(2) Aさん ～ 患者の立場から(居宅支援事業所・介護福祉士)

介護関係の仕事をしていたAさんは2年前に乳がんと診断されました。手術に続いて抗がん剤とハーセプチンによる治療を受けて10ヵ月間休職した後に復職。しかしその後、周囲を指導する立場だったAさんは、長期休職の後ろめたさや申し訳なさから、遠慮のようなものが徐々に積み重なり、周囲とのすれ違いと責任ある立場との間で、次第に追い詰められるような感覚があったと言います。

「今振り返ってみると、自分からも“今はこういうことで困っています”とか相談できればよかったのですが、それも遠慮があって言えませんでした。上司からも、本当に一言でも声をかけてもらえれば、自分も正直に気持ちが話せたのではなかったかと思います。」そう語るAさんは「今後同じことが繰り返されないためにも」と上司と面談し、思いを伝えた上でその後職場を退職しますが、改めて仕事が自分の生きが이었다こと、生活の糧だけではなく自分を高めるものでもあったということを再認識します。前の職場を退職した直後から就職活動を開始し、翌月には早くも次の職場が決定。病名は特に隠さなかったものの、「現在働けるなら問題ない」と問題にされなかったと言います。

「働きやすい職場をつくるためにも、長期休職から復帰した人に上司は何か一言でいいから言葉をかけてあげてほしい、一言で十分かもしれないんです。」と強調して、話を終えられました。



(3) 加藤悦子さん ～ 雇用者の立場から (YI'Sケアサポート株式会社)



加藤さんは雇用者の立場から、半年前に乳がんが診断された従業員とのやりとりについて話をされました。職場が好きだからできれば辞めたくないと話す従業員Bさんに、加藤さんは「ならば仕事を続けよう、どうしても無理ならそのときに考えよう」と答えました。Bさんは以前怪我で退職したとき、辛いリハビリを頑張って予定より早く復職したこともありました。

しかし、それに加えて、職場が高齢者向けの施設であることも理由でした。「施設を開所して5年になりますが、私はオープン当時から働きやすい職場をつくり、職員を大事にして長く勤めてもらおうと心がけてきました。施設の利用者さんはみな高齢者です。職員が変わるのは強いストレスになりますが、それは逆に自分のことをわかってくれる人がいると安心するからです。」抗がん剤の副作用を抱えながらBさんが仕事を続けるのは現実的に難しいかもしれないと思いつつ、こまやかな心遣いが感じられるBさんの働きぶりに接していた加藤さんは、Bさんには利用者さんの「いつもありがとうございます」という声を聴きながら生きがいを持って仕事を続けてほしいと強く願ったと語りました。

発表後、「従業員が何か働きにくい状況になったときに、雇用者として加藤さんがいちばん大事にしていることは何ですか？」という質問に対し、加藤さんは「まず本人の意思です」と即答。「仕事を続けたいと言われれば、それなら何とかしたいと思います。やる気がないなら話は違いますが、続けたいと思う人には何とか道を開いてあげたいと思い、その道をいっしょに探ります。前提には、その人のそれまでの実績や他の職員との信頼関係もあるでしょうが、意思、それだけです。それさえあればなんとかしたいと思います。」と強調されました。

(4) 玉置一栄さん ～ 医療者の立場から (石巻赤十字病院 看護部 乳がん看護認定看護師)



石巻赤十字病院で看護師として勤務する玉置さんは、医療者の立場からの就労支援について話をされました。長く東京都内のがん専門病院に勤務をしていた玉置さんは、2008年に地元石巻に戻って3年目に震災に遭遇。「自分自身いろいろなことがありましたが、当時の同僚や先輩、先生、そして患者さんが石巻まで会いに来てくださいました。多くの方々からたくさんのご支援をいただいたとともに、精神的に支えていただきました。」と語る玉置さん。それまで取り組んできたがん看護を通して恩返しをしたいと考え、病院の支援も得て乳がん看護認定看護師の資格を取得して現在の勤務に活かしています。

患者さんが、がんの治療と仕事の両立を目指すとき、玉置さんはいつも患者さんに、仕事をするこの意味について問いかけているといいます。患者さんから「仕事は続けられるだろうか？辞めた方がいいのか？」「上司に病気をどう伝えようか？」「仕事と治療時間との調整をどうしたら？」「パート職なのでなかなか仕事は休めない」などの相談を受けたとき、玉置さんは「Cさんにとって仕事にはどういう意味がありますか？」「人生にとって仕事をするということはどういうことなのでしょう？」と聞いて、一緒にふりかえる機会を持っているそうです。

次に、職場で予想される問題点をともに明らかにして、個々の患者さんの生活背景や仕事の内容にもとづいて、対策もできるだけ具体的に考えること。たとえば職場の仲間や上司に、自分自身の病気や治療のことをどのように、どこまで伝えるか。これだけはどうしても職場関係者に知っておいてほしい副作用などについて、職場への説明のしかたを一緒に考えるそうです。社会保障については、がん相談支援センターのスタッフにつなげます。さらに、ネガティブなことだけではなく、自分が就労場面で今できることをアピールすること、そして、ご家族の役割調整などについてもアドバイスするということです。

最後に玉置さんは、震災以降の地元の家族形態や雇用状況の変化にも触れ、行政とも連携して地域ぐるみで取り組む必要性を指摘して、話を締めくくりました。

体験発表はいずれも心に響く内容でした。参加者アンケートでも多くの声が寄せられました。

★診断を受けたご本人から

「体験者の生の声が聞けて良かった」「聴衆の前で体験談を話してくれたことに感謝」「心にしみた」「職場に理解者がいることの大切さを理解した」「再就職を実現させたご本人の意思が素晴らしい」「コミュニケーションの大切さや職場から求められる実感が就労意欲に結びつくことが印象的」「雇用者の温かさがうらやましい」など

★医療者から

「実際の話が聞けてよかった」「大変な思いを乗り越えていることが伝わりました」「病院に勤務していると国などからの指示を実現することに気持ちが動くが、どうして相談窓口を設置するのか、誰のための窓口なのか、と改めて考えさせられた」「今後の仕事につなげたい」「患者も会社も想像以

上に苦しいのだと思った」など

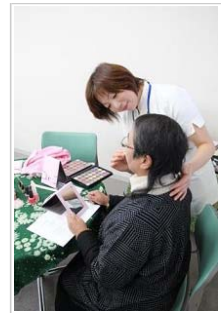
★行政関係者・企業関係者から

「各々の立場での体験に多くを学んだ。他の市民にも伝えてほしい」「聞いて初めてわかることもある。もっと聞きたい」「話にくいことを話していただき参考になった」「辛い現実など、職場にいるものとして心がけるヒントになった」など

第3部 カフェタイム

続いて、参加者が8つの小グループに分かれてカフェタイム。各グループに、石巻赤十字病院のスタッフや県内外から参加した医療者がファシリテーターとして参加しました。お茶を片手に自由に話し合い、あちこちのグループから大きな笑い声があつた中、和やかな雰囲気の中でカフェタイムが進みました。会場の一角にはソシオエスティシヤンの瀬戸真由美さんによるメイク・ネイルブースも立ち、メイクアップや爪の相談をする参加者も見られました。

カフェタイムの最後には、各グループの代表が話し合ったことを報告。職場とのコミュニケーション、患者会の意義、病状や治療法、医療者ががんになったとき、子どもとの関係、家族を支えること、医療費など、実にさまざまなトピックが話し合われたことが報告されました。



カフェタイムについての参加者アンケートでは、異なる立場の人たちが一同に会してざっくばらんに話し合うことの良さや、がんに特化した集会だったのでがんの話が安全にできることなどが好評でした。

★診断を受けたご本人から

「思いを聞いてもらって心が軽くなった」「医療者の思う所が知れて良かった」「自分とは別のがんの方や医療者との話から新たな発見があった」など

★医療者から

「人それぞれ違う背景で切実な悩みがあることを忘れてはならないと感じた」「“医療者”という壁をとって話ができた」「信頼関係の大切さを実感」など

★行政関係者・企業関係者から

「小グループのサバイバーの話から力を頂いた」「小グループの話は貴重だった」など

全体としての印象についても、細やかな準備(お茶やお菓子も含めて)の感謝の声や、また参加したい、また開催してほしい、という声が多数寄せられました。

閉会の挨拶

3時間に及んだご当地カフェin 石巻の最後は、石巻赤十字病院 乳腺外科 古田昭彦部長による閉会の挨拶でした。「今さら言葉を加えるのはヤボ」「私は3歩あるくと物事を忘れるんです」と言いながら笑顔で参加者の前に立った古田部長は、「立場はいろいろとありながら率直にみなさんがかもしだしたこの空気が、地域社会の空気になったら、きっとすばらしい社会になるのだろうなという感想を持ちました。」と全体をしめくりました。



最後に総合司会の安田有理さんが一言。

「今日の出会いが何かにつながってほしいなと思っています。これで会を終わらせていただきます。あの・・・最後にアンケートをぜひお書き頂ければと思います。」(会場爆笑)



病院をあげてカフェを実現してくださった石巻赤十字病院スタッフの皆様へ、心から感謝申し上げます。「楽しかったよ〜。」と言って会場をあとにする参加者のみなさんの笑顔が、カフェの成功を何よりも物語っていました。

(文責 高橋 都)

掲載関係

■新聞記事

石巻日日新聞 1月30日(木)掲載

仕事に生きがいと喜び

石巻赤十字病院は25日、通院や体調変化で休職や離職を余儀なくされがちながん患者への理解を広める「就労支援ご当地カフェinいのまき」を開催した。地元のがん患者や医療従事者、雇用者が参加し、それぞれの立場を訴えたほか、生きがいや収入額など多面的な意味を持つ「働く」と「治療の両立」について、参加者がコーヒーや茶を飲みながらうまくはらんに話し合った。

がん患者就労支援ご当地カフェ

国立がん研究センターがん対策情報センター「がんサバイバシブ」が、がんサバイバシブ支援研究部が東京で行っている勉強会の石巻版で、地方開催は初めて。参加者は、がん患者や家族、医療従事者、行政担当者など約50人が参加した。

石巻赤十字病院で初開催 雇用者の理解が重要

高橋さんは働くがん患者と雇用者が抱える悩みを紹介した上で、「両方が納得できる方向性を見出すには、いいと助言、能力と意欲がある患者を支援する」とこの職場へのメッセージも挙げた。

第2部ではがん治療で離職した女性が、再就職するまでを報告。地域の仕事を手伝ううち資格取得の意欲が増した女性は、「社会から隔離される思いだったが、周りから必要とされてつながりを感じられた」と述べた。

仕事が生かすという別の女性は「前の勤務先では、仕事を長くはじめて上司に頼りたくなかったが、今回の講演で、評価に対する不信感で追い詰められた」と告白。「再就職先では苦役に問題ないというくらい、自分にとってそのひと言が大事だった」と振り返った。

にもストレス、働きやすい職場に努め、女性女性従業員が就労を支援した。治療をしながら、フルタイムで働ける環境を整えたい。治療しながら、フルタイムで働ける環境を整えたい。治療しながら、フルタイムで働ける環境を整えたい。

河北新報 1月28日(火)掲載

がん患者と道探る 普通に働ける社会

就労支援でご当地カフェ

がん患者の就労について理解を深めることを狙った「就労支援ご当地カフェinいのまき」が25日、石巻赤十字病院仮設南病棟であった。がん患者の多くが通院や手術、体調変化などで休職、離職を余儀なくされるほか、病状が落ちても復職が難しいのが現状という。参加者は、基調講演、当事者の立場からの意見、スモールグループミーティングを通して、がん患者が普通に働ける社会の実現に向けて方策を探った。

基調講演する高橋支援研究部長＝石巻赤十字病院仮設南病棟

基調講演や企業からも意見

両方が納得できる方向性を出すのが大切」と話した。

がん経験者も、能力、意欲のある人を雇用するのは企業にとっても強みになると強調。働ける社会の実現を望むのはがん患者の願いでも、雇用者も、波及効果も考えた。

石巻市に在住ががん経験者2人の体験談は、自分の体の体調は、自分自身が主として地域の雇用環境を整えたい」と前置きしながら、一方で「働き続けたい」と前置きしながら、患者の女性を支援する大切だと話した。

「がん経験者も、雇用者も、働ける社会の実現を望むのはがん患者の願いでも、雇用者も、波及効果も考えた。」